

【連載：「私の好きなこの一曲」 No.4】

海岸通

一般社団法人日本オーディオ協会

会長 小川 理子

小学校 4 年生の時に、兄が両親からプレゼントされたクラシックギターを初めて弾いてみた。小さな手でコードを押さえるには苦勞した。ギターの付属品として教則本があったので、誰に教わることもなく、本を見ながらコードを覚えて、教則本の中の曲も何曲か弾いてみた。昭和の時代なので、教則本の中に掲載されている曲は、おしゃれでも何でもなく、どうしてこんなに古臭い曲が載っているのか、、、と子供心に疑問に思いながらも、次々とページをめくっては自分の気持ちにぴたっとくる曲を探した。ギター曲としては鉄板である「禁じられた遊び」は、その中で一番印象深い。弾くうちに上達して、家族にも聴かせてあげた。同じ頃に、映画「禁じられた遊び」を見たときに、映画のストーリーとの相乗効果で、切なさや哀しさに胸がつまる思いをし、涙を流し、あのメロディーを自分でも弾きたくて、何度も練習したのだと思う。

中学に入学すると、3 年生の先輩達がギタークラブを作っておられて、放課後にフォークギターを弾いておられた。音楽が好きな私にも声をかけてくださり、フォークギターを弾くようになった。当時の「かぐや姫」「風」などが歌う数々のフォークソングを、女性だけでギター弾き語りをするのは、本当に楽しかった。「神田川」「赤ちょうちん」「妹」「加茂の流れに」「僕の胸でおやすみ」などなど、青春の 1 ページ、と言える日々を懐かしく思い出す。



その中で「海岸通」は、なぜか大好きになった。たぶん原体験として二つのエピソードがあると思う。私は大阪市西区の立売堀という街で生まれ育った。大阪市内を東西に走る中央大通りと南北に走る御堂筋の交点である本町、から 少し西に位置する。小学校の頃から、自転車よく大阪港まで走って夕陽を見に行った。大阪湾に沈む夕陽がとても大きくて美しかったのだ。それだけではなく、何か自分一人になりたいという気持ちになったときに、大阪湾の海を見て、夕陽

を見ると妙に心が落ち着いた。もう一つのエピソードは、私が赤ちゃんの頃からお世話をしてくださっていたお手伝いさんが、四国の高松から住み込みで来てくださっていた。お手伝いさんのご両親が、大阪の私の家に来られる時は、帰りは大阪港からフェリーに乗られる。そのフェリーを見送る時、岸壁とフェリーとで、紙テープをお互いに持って、船が港を出て、テープが切れるまで手を振り続けて、別れを惜しんだ。本当に情緒豊かな風景を今でも思い起こす。港、夕陽、船、海、別れのテープ、、歌詞の中に出てくるこれらの言葉と、しみじみと美しいメロディーとコード展開が、私の心の奥深くにはまったのだと思う。

当時のフォークソングは、たいていラジオで聞き、カセットテープで先輩や友人と曲のやりとりをし、好きな曲をピアノやギターで弾き、文化祭で披露する、というパターンだった。高校に入ると、フュージョン系に走り、大学に入るとフォークもあまり聴かなくなった。

今年、春からのコロナ禍で、家にいる時間が長くなると、YouTubeで懐かしの歌などを聴くことが多くなった。主人と私が同じ年なので、青春時代に聴いてきた曲も同じで、家のリビングで、二人でテレビのYouTubeを見ながら、歌ったり、踊ったりすることが多くなった。便利な時代になった。圧倒的な数の曲の選択肢がいとやす手に入り、いくらでも、昔に戻れる。

今は、ライブハウスやコンサートが通常どおりに開催できなくなっている。生業にされている方々は大変辛い思いをされている。オンラインでのライブ、コンサートがどんどんと増えてきた。

日常的にバーチャルとリアルで空間を行き来することのみならず、過去と現在の時間も行き来している自分や社会、これからニューノーマルの社会の中で、未来のオーディオをどのように活性化していくかを考えたい。

